

近世・近代における「つもりだ」の用法変遷

川島 拓馬

キーワード：「つもりだ」、意志表現、近世語、近代語、否定形式

要 旨

「つもりだ」は一般に意志を表す形式とされるが、話者の認識を表す〈思い込み〉や〈仮想〉といった用法も存在する。「つもりだ」確立期の近世後期における用例を調査すると〈意志〉だけでなく〈思い込み〉用法も既に見られ、現代語に見られる全ての用法が存在していると言える。しかし用法の点から詳しく見ると近世後期の段階では典型的な〈意志〉用法に偏っており、明治・大正期にかけて〈思い込み〉等の用法の比率が高まっていることが明らかとなった。従って、「つもりだ」における変化は意志表現専用化ではなく、寧ろ無意志表現への拡大であると捉えることができる。また、否定形である「つもりはない」は近世期には例がなく、「つもりだ」の成立から100年近く時代を下った20世紀初頭になって初めて見られるようになる。このことから、「つもり」は意志を表す名詞として機能しており、助動詞化の度合いは比較的小さいことが示唆される。

1. はじめに

現代日本語において意志を表す表現には様々なものがあるが、その中で「～するつもりだ」はごく一般的なものであり、これを扱った先行研究も非常に多く見られる。しかしながら「つもり」の用いられ方は多様であり、単純に意志表現の形式と言うだけでは不十分な面もある。特に、「つもり」に前接する語句によって表される意味が異なるため、「つもりだ」について論じる際にはその用法に注意を向けることが重要であると考えられる。

一方、形式名詞「つもり」がコンピュータを伴って文末形式として用いられるようになったのは、およそ近世後期とされている。だが、先に述べた「つもりだ」の用法に関

する歴史的な考察はほとんどなされていない。「つもりだ」という文法形式が存在していることと、その性質が現代語の同じ形式にそのまま繋がっているかどうかは別の問題である。現代に近い時代においても変化は起き得るのであり、そうした様相についても詳しく見ていく必要がある。

本稿では「つもりだ」という形式が一応の成立を見た後の展開に焦点を当て、その変化の実態を明らかにしていく。その際、「つもり」に前接する語句や「つもりだ」の用法に着目することで、本形式の持つ細かな性質の変容を指摘する。「つもりだ」の通時的な展開が明らかになることで、その本質的な側面に迫ることが可能になると思われる。

2. 先行研究

2.1 「つもりだ」の用法

「つもりだ」は意志表現としての例を最も思い浮かべやすいが、実際には幾つかの用法に分けられている。形式名詞としての「つもり」の用法を網羅的に扱った研究である吉川・酒井（2003）によると、「つもりだ」の用法として以下の3つが立てられている。

- (1) 私は夏休みに旅行に行くつもりです。 〈意志〉
- (2) 確かに火を消したつもりだ。 〈思い込み〉
- (3) 小さい子どもになったつもりで遊ぼう。 〈仮想〉

(1)はいわゆる意志表現としての「つもりだ」であり、発話時において未実現の事柄について、発話時以降にそれを実現させようと考えていることを表している。(2)はこれとは異なり、「火を消した」と話し手が思い込んでいる場合であり、実際に「火を消している」のかどうかは分からない。これに対して事実と反していることが明らかである場合が(3)であり、実際には違うことを承知しながらも仮にそうだと想定して発話している。〈思い込み〉と〈仮想〉は似通った用法であり、高梨（2016）ではこの2つを〈信念〉としてまとめている。

「つもりだ」の用法は、基本的に前接する動詞の形態によって分かれる。動詞のル形が前接すれば〈意志〉に、動詞のタ形が前接すれば〈思い込み〉もしくは〈仮想〉となる。八田（2001）はダブルテンス形式として「つもりだ」を捉えており、第一テ

ンス形のル形・タ形によって「現在の意志」か「現在の思い込み」かが区別されるとしている¹。同様の主張は吉川・酒井（2003）にも見られ、前接動詞の形態は「つもりだ」の用法を分ける重要なポイントであると言える。

しかし実際はこれほど単純ではなく、ル形で〈思い込み〉を表す場合もある。

(4) 外国語ができるつもりで通訳をかってでた。

ここでは動詞のル形が「つもり」に前接しているが、〈意志〉ではなく〈思い込み〉を表していると考えられる。「できる」は可能の意を表す動詞であり、話し手の意志を表さないため〈意志〉の用法とはならない。この指摘は中道（1993）でなされたものだが、先に挙げた八田（2001）や吉川・酒井（2003）でも言及されており、「つもりだ」が〈意志〉の用法となるのは「意志動詞のル形」の場合であり、状態動詞や可能動詞といった無意志動詞の場合は〈思い込み〉を表すとされている。

一方で、「～たつもりだ」は〈思い込み〉の用法に限定される（八田 2001、吉川・酒井 2003、高梨 2016）。なお〈仮想〉は言い切りの形では通常現れず、「つもりで」という形をとった時の用法である²。

動詞のテイル形が前接する場合は、動詞の意味によって用法も異なる。

(5) いつまで泊まっているつもりですか？

(6) その件についてはよく知っているつもりです。

(5)のように意志動詞であれば動作の継続を表し〈意志〉の用法となるが、(6)のように無意志動詞が前接すればそのように話者が考えているという意味で〈思い込み〉の用法となる（吉川・酒井 2003）。

ここまで述べたことを簡潔に示せば、前接する動詞が意志動詞であれば〈意志〉を、無意志動詞であれば〈思い込み〉か〈仮想〉を表すということになる。つまり、「意

¹ 第二テンス形については、タ形の場合「実際にあった過去」と「現在から顧みる過去」の2つの場合があると指摘している。

² このため、厳密に言えば〈仮想〉は「つもりだ」の用法とは言えない。とは言え〈意志〉や〈思い込み〉では「つもりだ」と「つもりで」ではほぼ同じ意味が表されており、「つもりで」を除外することは妥当でない。この方針を採るならば、後接するのがコピュラ助詞「で」かによって区別する必要はなく、従って本稿では〈仮想〉用法も扱う。また5節で述べるように、〈仮想〉と〈思い込み〉の連続性も重視したい。

志を表すことのできる表現か否か」が用法を分けるのであり、タ形の場合は未来の出来事を表せないため〈思い込み〉〈仮想〉となる。同様に、無意志表現である形容詞・形容動詞が「つもりだ」に前接する場合も〈思い込み〉を表す。

(7) 私はまだまだ若いつもりだ。

(8) 私はまだまだ元気なつもりだ。

このように、「つもりだ」の用法には〈意志〉以外にも〈思い込み〉や〈仮想〉がある。そしてこの差は「つもり」に前接する要素によって決まることが指摘されている。このことから、中道（1993）では「つもり」自体は単義であり、「あることを心のなかに設定する」といった意義素を仮定している。意志表現が前接すれば「ある動作を確実にを行うということを心のなかに設定する」という意味になり、〈意志〉の用法となる。無意志表現（例えばタ形）であれば「ある事柄が実現したということを心のなかに設定する」という意味になり、〈思い込み〉の用法となると述べている。

現代語の「つもりだ」についてコーパスを使用した用例調査を行った研究に、高梨（2016）がある。BCCWJより収集した全11138例から1000例をランダムに抽出し、分析を行っている。前接形式を用例の多い順に並べると、スル(69%)、シタ(10%)、シテイル(7%)、指示詞(7%)、Nの(5%)となり、同様に後接形式では、ダ(43%)、～ガナイ／ナカッタ(18%)、ダッタ(16%)、デ(12%)、デイル等(5%)となった。更に用法の面から見ると、〈意志〉が全体の約80%を占め、〈信念〉は約20%程度であったことが示されている。形式と意味の対応関係も調査されているが、これはほぼ先行研究で指摘されている事柄であり、実例によってそれらの指摘が裏付けられたと言える。

2.2 「つもりだ」の歴史的変遷

通時的側面から「つもり」を扱った研究には、佐田（1974）、土岐（2010）、北村（2010）、中村（2017）がある。まず佐田（1974）は古代語から近代語への移行の過程において、助動詞に近い機能を備えた「はず」と「つもり」の2つの形式について、その成立と定着が「べし」「む」などどのように関連するのかについて考察している。「つもり」については、動詞「積もる」から派生したものであり、近世前期では「積もる」「重なる」より、「つもった結果」から「程度・限度」となる方向と、転じて「見積もり」「予算・計算」から「推測・予想」になり、更に「意図」「考え」「心組み」まで広い領域を担っていたという。しかし意志表現となるものはまだ偶発

的であったが近世後期になると「つもりだ」の用例が一層明らかな形となり、これより天明期（1781-89）をもって一応の成立期と見なしている。

土岐（2010）は、近世期の豊富な資料の博捜から「つもり」の歴史の変遷を明らかにしている。土岐（2010）は「つもり」の歴史を第一期（17世紀末～18世紀初頭、上方の浮世草子・浄瑠璃類）、第二期（18世紀半ば～19世紀、文化文政期以前の江戸の黄表紙・洒落本類）、第三期（19世紀初頭～19世紀半ば、文化文政期から天保期の江戸の滑稽本・人情本類）、第四期（19世紀後半～20世紀初頭、明治以降の落語口演速記・小説類）の4つに区分し、「つもり」が意志の用法に固定化していくさまを示した。

第一期においては、〈意志〉を表す用例もあるが、〈計算〉や〈推量〉を表すものも見られる。

- (9) もはや首尾見合せて、この遊びもやめる積りに工面するうちに（好色敗毒散）
(10) 男子の生まれし時、それが成人の後悪所の遣ひ銀とて百貫目除けてをいたりとも、それは積りの知れぬ事也。（好色萬金丹）
(11) 思ひ入れの女郎請出してしまふて、悪所の通ひを止めたが上分別といふ人あれど、それは岡の積もり也。（傾城禁短気）

用例数としては、〈計算〉の意を表すものが中心となっている。(9)のような意志用法も、後の時代のようにはっきりとした意志を表すというよりも「見込み」「計画」「考え」といった〈計算〉の意をかなり含んでいると述べられる。(10)のように、連体修飾節なしで「つもり」が現れる例があるのも特徴である。第二期では(13)のように〈推量〉の意を表すものもまだ残っているが、〈意志〉用法が中心となっている。

- (12) 平「いや時にこよいは、気をかへて見るつもりじやぞへ」（遊子方言）
(13) 東東南蛮北狄世間のおつもりも。かへり三升の定紋は、孫に櫟葉ほんだはら（名歌徳三舛玉垣）

この時期には〈意志〉用法に統一されつつあり、後ろに断定辞を伴って用いられる例が大半を占め、現代語と同様の傾向を示している。また、修飾語句なしで「つもり」が単独で用いられる例は既に見られなくなっている。

第三期も傾向としては似通っており、〈意志〉用法が中心で〈推量〉も一部残っている。ただし全体的に〈意志〉用法の用例数が大幅に増加している点が特徴である。

- (14) お杉「私が立合てしらべるつもりで、座敷へ行から、はやく手まはしをして着替や何かは（中略）内證で預けないまし（春色梅児譽美）
- (15) 女房「鉄砲で打殺した物が薬位で届くものじやアないはな。つもりにもしれたもんだ」（浮世風呂）

「つもり」の前接語には動詞の単純形かそれに助動詞類のついたものが、後接語には断定辞か終助詞がくるものが多く、「～するつもりだ」という表現形式が〈意志〉を表す基本的パターンとして定着してきたことが窺える。第四期になると〈推量〉用法は姿を消し、「つもり」が意志専用形式として定着したと指摘している。

- (16) 良石和尚「孝助殿、お前歸りがけに屹度劔難が見へるが、どうも遁れ難いから其積りで行きなさい」（怪談牡丹燈籠）

土岐（2010）は「つもり」の歴史について、〈意志〉以外の用法が徐々に見られなくなること、文の述部が前接し断定辞が後接することで「意志の内容」＋「つもり」＋「断定辞」という形で固定化していくことを明らかにした。

一方、北村（2010）では「つもりだ」の用法を考慮に入れた上で通時的な記述を行っている。まず北村（2010）は、「つもり」の果たす役割を「事態の実現可能性に関する計算」と仮定し、〈意志〉と〈思い込み〉の用法が生じる要因を説明する。意志動詞のル形が前接した場合、当該事態が未実現であることが確実であるために事態の実現を計算することができ、それを実現するための〈意志〉と解釈される。前接する語句が動詞タ形や無意志動詞・形容詞の場合、そもそも事態が実現するかどうかといったことを計算するのは不可能であり、それを敢えて計算することで〈思い込み〉の解釈が生じるという。計算不可能な事態を敢えて計算することによって、「実際にはそうではない」という事態の非実現性を含意すると述べている³。

³ 八田（2001）が述べるように、〈思い込み〉の用法（ここでは「～したつもりだ」）において、事態の実現／非実現は外部状況等により両方の可能性がある。実際に実現の例も挙げられている。ただし、用例数としては非実現の方が多くなっている。

続いて、近世における「つもりだ」の用法を調査し、以下のような〈意志〉の用法が存在することを指摘した。

(17) きさまおだはらか。おいらア小清水か白子屋にとまるつもりだ。

（東海道中膝栗毛）

(18) 仇「【羽織を】ナニまたこしらへるはネ。大事にはせずといゝが、米の字に知れちやアわりいから、増さん処へ預けてお置ヨ」丹「そうヨ、そのつもりだ」

トいひながらひき寄る。

（春色辰巳園）

一方で、近世においては〈思い込み〉の解釈につながる「過去形・無意志動詞・形容詞＋つもりだ」という形は見られないという。〈思い込み〉の用法と解釈できるものとして、「[人]のつもり」という例を指摘している。

(19) 由さん上るヨ。私じやアいやだろうが、山科の直さんのつもりでお上り。

（春色辰巳園）

明治以降になると、現代語と同様に〈意志〉〈思い込み〉の両解釈が現れ、形式的にも過去形や形容詞が「つもり」に前接する例が見られるようになると述べている。

このような変化が生じた要因を、先に挙げた「つもり」の役割から次のように説明している。まず近世において〈意志〉の用法が主流であったのは、「つもりだ」という表現が形式化していく過程において「計算」と最も結びつきやすい解釈が〈意志〉であったからだという。〈意志〉と〈思い込み〉の両解釈を表し得た形式の「[人]のつもり」には、「[人]が計算すること」と「[人] デアル計算（考え）」の二通りがあり、後者は一種の措定関係にあると言える。(11)は前者の解釈であり、(19)との差は助詞「の」の解釈に起因すると考えることができる。「XはYつもりだ」の意味関係は「つमりの値がY」という関係にあり、「～つもり」という名詞修飾の構造がいわゆる措定関係に固定化されることが〈意志〉から〈思い込み〉へと用法を派生させる要因となったと説明している。そして、そのきっかけとなったのが「[人]のつもり」の解釈可能性だったのではないかと北村（2010）は述べている。

また中村（2017）は意志表現としての「つもりだ」「～しようと思う」「～しようと思っている」を取り上げ、その変遷と定着について論じた。特に、使用が会話文か地の文か、主節か従属節かといった観点から、モダリティとしての性質について考察

が行われている。「つもりだ」の定着時期については土岐（2010）と同じく文化文政期としているが、通時的に見ると、意志表明を中心としつつも時代を下るにつれ述べ立ての用例が増加することを指摘している⁴。

3. 本稿での分析における問題設定

本節では、「つもりだ」の歴史的変遷を見る前に、どのような点が問題となるのかを指摘しておく。これは、どのような問題意識の下で用例の分析を行っていくかという点を、先に明らかにするものである。

3.1 先行研究の問題点

まず「つもりだ」の用法が大きく〈意志〉と〈信念〉（高梨 2016）の2つに分かれることは問題ないであろう。この2つの用法が「つもり」に前接する語句によって分かれるというのも事実在即しており、先行研究をまとめると、要するに意志表現が現れれば文全体も〈意志〉用法に、無意志表現が現れれば〈思い込み〉か〈仮想〉用法になるということである。この事実から考えるに、中道（1993）の指摘は注目に値すると思われる。中道（1993）によれば、「つもり」自体は「あることを心のなかに設定する」という一つの意味を有しており、それが〈意志〉や〈思い込み〉の用法となるのは前接語句の機能に依るものだという。「つもり」自体の意味が一つであるということは、動詞「積もる」から派生し「計算・見積もり」から「計画・考え」へと変化し、意志を表す形式となったという歴史的背景から見ても頷けるものである。

続いて「つもりだ」の歴史的変遷についてだが、まず名詞「つもり」の意味の変遷と、意志表現として固定化していく様相は土岐（2010）で詳細かつ実証的に論じられており、重要な指摘であると考ええる。しかしながら土岐（2010）では現代語の「つもりだ」に関する研究が全く参照されておらず、「つもりだ」イコール意志表現のような扱われ方がなされている。そのため用法が〈意志〉か〈思い込み〉かといった点には注意が払われていない。「つもり」の前接語も調査されており、第三期からタ形が前接しているが、これもバリエーションが増加したといった説明がなされており、

⁴ 中村（2017）によれば、意志表明とは一人称主体の現在形（疑問の場合は二人称主体）で使われる場合のモダリティ、述べ立てとはそれ以外（三人称主体や過去形）の場合に現れるモダリティである。

〈思い込み〉用法との関連は述べられていない。一応、〈意志〉とは別に〈意図〉とも呼ぶべき場合が指摘されており、次のような例が挙げられている。

(20) 源「太吉なぎア一番、糖をねぶらせると、本気で勝たつもりで居る」

（浮世風呂）

(21) 弥次郎兵へは旦那のつもりゆへ、わらじのまゝちややの板の間にあぐらをかき
て
（東海道中膝栗毛）

このことについて土岐（2010）は、「この時期の「つもり」が、実質的内容として未来に限らずどのような事柄でもうけることが出来、そこに意志や意図の意味を付加することが出来るのは、それだけ「つもり」の用法が、意志表現として確立され、固まってきたからであると思われる（p.116）」と述べているが、この説明には疑問が残る。「つもり」が意志表現として確立していたのなら、過去や現在の事柄を受けられるとは考えられないからである。「意志表現」に対する明確な定義は述べられていないが、(20)(21)のようなものを〈意志〉に含めるのならそれは概念として広すぎるであろうし、現代語の記述との間に齟齬が生じることになる。そもそも中道（1993）が指摘するように、「つもり」自体には〈意志〉の意味はなく、意志動詞が前接するから文全体が〈意志〉用法となるのである。このため、「つもりだ」の用法がどのように変遷して現在に至っているのかという点は明らかにされていない。

一方北村（2010）は「つもりだ」の用法にも配慮した上で通時的な考察を行っているが、土岐（2010）で行われた「つもり」の歴史的変遷に関する研究が参照されていないという問題がある。このため、(20)のような例があるにも関わらず、「近世における「ツモリダ」の承接関係は「現在形・意志動詞＋ツモリダ」「～ノツモリダ」だけである（p.470）」「近世における「ツモリダ」の解釈が〈思い込み〉となるのは、「[人]ノツモリダ」のばあいである（同）」といった指摘がなされている。これは事実と反しており、「つもりだ」の用法変遷を明らかにしたとは言えない。更に〈思い込み〉用法発生を要する要因を「[人]のつもりだ」における助詞「の」の解釈に求めるという主張も、前提が誤っている以上、妥当性を欠いていると考えられる。

以上、「つもりだ」の歴史的変遷を考える上では、形式がいつごろ出現したかだけでなく、どのような意味で用いられているかを明らかにすることが必要であると考えられる。そのためには、現代語の研究における「つもりだ」の用法に関する記述と、歴史

的変遷を対応させて見ることが求められるだろう。本稿では、以下そのような問題意識の下で分析・考察を行っていく。

3.2 〈意志〉の2用法

「つもりだ」に〈意志〉と呼ばれる用法が存在することは、既に多くの先行研究が明らかにしている。ここで、本稿における〈意志〉を規定しておきたい。本稿では当該の事態が発話時において未実現のものである場合、〈意志〉用法と見なすこととする。「夏休みに旅行に行くつもりだ」を例に挙げれば、「旅行に行く」ことは発話時以後に行われる事態であり、発話時においてはまだ実現していない。これに対して「確かに火を消したつもりだ」では、「火を消した」ことは発話時から見て過去の出来事であり、既実現の事態である。従って〈意志〉ではなく〈思い込み〉用法となる。なお「つもりだった」の場合は、基準時における実現の在り方によって判断する。

本稿では上記のように〈意志〉を規定するが、〈意志〉の中でも幾らか性質の異なった用法があるように思われる。例えば、以下のような例である。

(22)今日は午後から研究室に行くつもりだ。

(23)今度の大会ではライバルチームに絶対勝つつもりだ。

いずれも発話時において未実現の事態について述べており、〈意志〉用法であると言える。しかしこれらは「自己制御性」という点において差が見られる。「自己制御性」とは、仁田（1991a）で「動きの主体が、自分の意志でもって、動作の実現化を計り、動きを遂行・達成することができる、言い換えれば、動きの主体が、動きの発生・遂行・達成を自分の意志でもって制御することができる、といった性質（p.243）」と規定されている。この性質には度合いが存在し、仁田（1991a）は3つのタイプに分類している。1つ目は動きの発生・過程そして成立・達成を自分の意志で制御できる「達成の自己制御性」の動詞（「食べる」「殴る」など）、2つ目は動きの成立そのものや達成は自分の意志で制御できないが、動きの成立・達成に至る過程や動き達成への企ては制御することのできる「過程の自己制御性」の動詞（「落ち着く」「合格する」など）、3つ目は動きの発生・過程・達成を自分の意志で制御できない「非自己制御性」の動詞（「呆れる」「飽きる」など）である。

この3つのタイプの動詞は命令文において異なる性質を見せ、非自己制御性の動詞は命令文を作ることができない（「*慌てろ」「*うきうきしろ」）。自己制御性のある動詞は命令文を作れるが、次のように命じられていることに違いがある。

(24) もういい、あっちへ行け。

(25) まあ、落ち着けよ。

「行く」は「達成の自己制御性」の動詞であり、(24)では「行く」という動作の成立・達成を命じている。一方(25)の「落ち着く」は「過程の自己制御性」の動詞であり、「落ち着く」という動作の達成を命じることとはできず、「落ち着くように努める」ことを求めているのである。これは、「落ち着く」という動作の達成は自己制御の埒外にあるためである。

同じことは意志表現の場合にも言え、(22)で「研究室に行く」ことはその動作の達成を自己の意志で制御できるが、(23)の「ライバルチームに勝つ」ことは自己の意志だけでは達成できない。従って(23)で述べられているのは、「勝つ」という動作が達成されるように努めるといふ意志であると言える。これより、仁田（1991b）、尾崎（2003b）に倣って(22)のような意志を〈達成の意志〉、(23)のような意志を〈過程の意志〉と呼び、区別することとする。単に〈意志〉と言った場合は双方を含む。なお、高梨（2016）に従い〈思い込み〉と〈仮想〉を区別しない場合、〈信念〉の語を用いる。この区別は、以下で「つもりだ」の変遷を考える上で重要となるものである。

4. 「つもりだ」の変遷

本節では、近世期から明治期までの「つもりだ」の歴史的な変遷について述べる。既に2節や3節で述べた用法の観点を中心に、具体的な用例を挙げながら「つもりだ」の使用に関わる変化を指摘していくこととする。

4.1 近世後期（江戸語）の用例

土岐（2010）が既に指摘するように、名詞「つもり」が「つもりだ」という形として固定したのは、18世紀後半から19世紀初頭の江戸語においてである。本稿では「つもりだ」への固定化の流れは中心的问题とせず、「つもり」がどのような用法

で使われているのかという点に注目する。従って、土岐（2010）での調査結果も踏まえ、稿末に掲げた江戸語資料を対象として「つもり」の用例を収集した。

これらの資料から、全 142 例の「つもり」の用例を得た。この中には、明治以降は用いられなくなる（推量）の用法（=13)(15) や、酒宴でもうこれでお開きにしようという時の最後の一杯の酒の意で用いられる例もあった。

- (26) 僧やつかい「とてものことに、おつきなもんでおつもりにしよじやないかいな」
（東海道中膝栗毛・p.417）

こうした例は「つもりだ」の用法を考える上であまり重要とならないので除くと、対象とする用例は計 129 例となった。この用例を、先述のように〈達成の意志〉〈過程の意志〉〈思い込み〉〈仮想〉の 4 つの用法に分類すると、それぞれ 99 例・7 例・18 例・5 例となった。〈達成の意志〉の例は先に土岐（2010）や北村（2010）に言及する際に幾つか挙げたため、ここでは省く（=12)(14)(17)）。〈過程の意志〉の例としては、一部の動詞や受身表現を受けたものが僅かに見られた。

- (27) 万「其替り今迄のやうにわる留なんぞはしますまいと今日から心をあらためる
つもりですハ」
（春色恋廻染分解・p.46）

- (28) 藤「悔しいねへといはれるつもりで、内の湯を待かねるふりで、おいらを引出しやアしねへか」
（春色梅児譽美・p.156）

いずれも発話時から見て未実現の事態であるため〈意志〉用法と言えるが、(27)で「心をあらためる」ことは話し手の意志だけで達成できる動作とは言い難く、また(28)の「いはれる」は受身であり話し手以外の人物の動作が関与することになるため、自己制御性は低いと考えられる⁵。よって、ここでは〈過程の意志〉を表していると考ええる。

一方、〈思い込み〉や〈仮想〉を表している例も既に確認できた。

⁵ 受身と同じくヴォイスに関わる使役表現については、仁田（1991b）において能動文と全く同じとは言えないが〈達成〉から〈過程〉に変わるほどの差はないとの言及があるため、〈達成の意志〉として扱うこととする。ただし使役表現に関わらず、自己制御性の高低には程度の側面があるため、〈達成の意志〉と〈過程の意志〉も截然とは分けることができない。

(29) 吉「目吉にあつらへて鳥雅さんの似顔にんぎやうの木としより偶とは、随分老人の穿ちには憎くもあるめへ。おみらんへはいゝ土産の積だが、お気に入らないかね」

（春告鳥・p.535）

(30) 丹「もしそうなれば、おれが留守中、米八がほうからよこした金だけは、おれが内證でおめへにやるから、外でこしらへたつもりで米八に返しねへな」

（春色辰巳園・p.428）

どちらも未実現の出来事について述べている例ではないため、〈意志〉用法とは捉えられない。(29)は「いい土産だ」と話し手自身が考えている例であるため〈思い込み〉、(30)は「外でこしらへた」ことは事実と反する事態であり、話し手もそのことを了解しているため〈仮想〉の例となる。

収集した「つもり」の前接語について、形式ごとの用例数を用法別に示すと以下の表ようになる。

【表1】近世後期江戸語における「つもり」の用法と前接語

用法\前接語	スル	その	Nの	どうする	サセル	シタ	シナイ/又	サレル	ナイ	マス	トイウ	計
〈達成の意志〉	67	5	6	8	7	1	3	0	0	2	0	99
〈過程の意志〉	3	1	0	0	0	0	0	3	0	0	0	7
〈思い込み〉	2	6	2	0	0	4	1	0	3	0	0	18
〈仮想〉	0	0	3	0	0	1	0	0	0	0	1	5
全体	72	12	11	8	7	6	4	3	3	2	1	129

動詞のル形が多数を占めるがそれでも半数程度であり、多様な内容を受けていると言える。動詞のル形は〈意志〉がほとんどであるが、無意志動詞の場合は〈思い込み〉用法にもなる。

(31) 米「おめへなんぞは親たちが、此方へ出れば、能旦那が五人も三人も直に出来て、親兄弟もそのおかげで、浮みあがるつもりでよこしもしたろうけれど⁶」

（春色辰巳園・p.317）

一方、動詞のタ形の場合は、ほとんどが〈思い込み〉か〈仮想〉になっている⁷。この調査の結果から、近世において〈意志〉系と〈信念〉系はほぼ同じような時期から

⁶ 当該箇所⁷の頭注によると、「浮みあがる」は「生活が楽になる」の意とある。

存在しており、前者から後者が派生したわけではないということが分かる。この点で、「[人] のつもり」という例を介して用法が派生したとする北村（2010）の想定には問題があると言えよう。

4.2 近世後期（上方語）の用例

「つもりだ」の歴史的変遷を扱った諸研究では、概ね 18 世紀後半には文末に位置する助動詞相当の形式として「つもりだ」が成立したとされており、多くの用例が挙げられている。しかしながらそこで言及されているのは江戸語ばかりであり、同時代の上方における状況は全く明らかにされていない。この点は近世語の実態を考える上では重要であると考えられる。近世前期（18 世紀前半）の上方語の状況は土岐（2010）に言及があり、また 2.2 節でも少し触れたため、ここでは近世後期（18 世紀後半）における上方語の調査を行う。

稿末に掲げた資料から、全 42 例の「つもり」の用例を得た。このうち考察対象となる「つもりだ」の例は 39 例であり、〈達成の意志〉が 32 例、〈過程の意志〉が 2 例、〈思い込み〉が 5 例であった。以下、例を挙げる。

- (32) 斗「イヤけふはどこへもいかぬ つもりじやがしかしちよつと梅花楼へよろふか」
(うかれ草紙・p.58)
- (33) マア嫁ぎたはわいやりになつてあつた所が此春は親旦那の本卦ですぐに隠居の
つもりなれどかんじんの嫁がきはまらぬので (竊潜妻・p.206)
- (34) ツネ「マアなんと思ふてまいるやら心が知れんあれでも死んでから極楽へ往く
つもりかしらんアタあつかましい」 (穴さがし心の内そと・p.480)
- (35) 兵「さて今宵のは。付ておいてもらいたい。銭のある つもりて這入たが。落し
たさうな。翌^{あす}のばん持て来ふ。四拾文じやナ」 (風俗三石士・p.282)

(32)(33)は未実現事態について述べているため〈達成の意志〉であり、(34)の「死んでから極楽へ往く」ことは話し手の意志で達成できる内容ではないため事実上希望表現

⁷ 1 例だけ、タ形が前接しながら〈意志〉としか解釈できない例があった。これは現代語ではそのまま言えない例であり、問題となる。時代を通じてこのような例は他に確認できないので、取り立てて論じることはしない。

・よね「ナニ今朝は妙見さまへ参りに来たつもりで宅は出ましたヨ」 (春色梅児譽美・p.48)

に近く、〈過程の意志〉と言える。(35)で前接する「ある」は状態動詞であり意志表現にはなり得ないため〈思い込み〉となる。

前接語ごとの用例数を以下の表に示す。

【表2】近世後期上方語における「つもり」の用法と前接語

用法\前接語	スル	その	Nの	シナイ/ヌ	トイウ	計
〈達成の意志〉	27	1	2	1	1	32
〈過程の意志〉	2	0	0	0	0	2
〈思い込み〉	3	2	0	0	0	5
全体	32	3	2	1	1	39

動詞ル形への偏りが江戸語に比べて大きく前接語のバリエーションが少ないと言えるが、全体の8割以上が〈意志〉系の用法となること、とりわけ名詞「つもり」の例のほとんどが「つもりだ」の形で使われている点は江戸語と様相を同じくしている。この点で、〈計算〉や〈推量〉の用法が一定数を占めていた近世前期の上方語からは変化が見られる。これより、「つもりだ」の変遷に関しては東西差よりも時代差の方を重視すべきだと考えられる。

4.3 明治前期の用例

ここでは明治初年から20年ほどを明治前期と考え、「つもりだ」の用例を見ていく。稿末に掲げた資料を対象として、先ほどまでと同様に「つもり」の例を収集した結果、全93例を得た。ここから〈計算〉と〈最後の杯〉の意で用いられている例を除くと、考察対象は87例となった。これらを4つの用法別に分類すると、それぞれ59例・9例・17例・2例となった。以下に例を挙げる。

(36) 大「おいらは今年^{ろんだん}龍動の博覧会へ押出すつもりだが夫^{それ}に就ておめへがたに一肩入ってもらはにやアならねへがマア悪イ相談じやアねへからはからすぐに一処に来てくれねへか」
(西洋道中膝栗毛・p.13)

(37) 相川「夫^{それ}だから孝助殿に娘の惚れるのは尤もだ。娘より私が先へ惚れた。夫れは斯うでせう。今年一ばい貴方のお側で劍術を習ひ、免許でも取る様な腕に成る積りだらう」
(怪談牡丹燈籠・p.29)

(38) 商「ハ、ア北さんおめへ洒落の先生のつもりかねしやれとは了簡ちがひな人ダ」
(西洋道中膝栗毛・p.98)

- (39) ころ「ゑたいもしれない^{とふじん}遠人なんぞのなぐさみ物になるのはいやで、＼はまの
口入やに待つてゐるうちも波戸場へかけだして身でもなげてしまをふか。イヤ
＼そうすると年をとつたおつかアがかわいそうだからうわばみに呑まれた夢
を見たつもりでがまんをしようか」 (安愚楽鍋・p.163)

(36)(37)は未実現の事柄について述べる例であるため〈意志〉用法となるが、前者は「博覧会へ押出す」のように自己制御性の高い動作であるが、後者は「免許でも取る様な腕に成る」のように自己制御性は低い。よって〈達成の意志〉と〈過程の意志〉が区別される。(38)(39)は〈信念〉系の用法であり、話者が自身を「洒落の先生」と考えている〈思い込み〉と「うわばみに呑まれた夢を見る」という反事実の事態を仮定する〈仮想〉の両方がある。

収集した「つもり」の前接語について、形式ごとの用例数を用法別に示すと以下の表ようになる。

【表3】明治前期における「つもり」の用法と前接語

用法＼前接語	スル	Nの	その	シナイ/ヌ	サセル	シタ	どうする	タル/テイル	マス	計
〈達成の意志〉	45	4	2	2	3	0	2	0	1	59
〈過程の意志〉	7	0	0	2	0	0	0	0	0	9
〈思い込み〉	0	7	6	1	0	1	0	2	0	17
〈仮想〉	0	0	0	0	0	2	0	0	0	2
全体	52	11	8	5	3	3	2	2	1	87

動詞のル形が全体の6割ほどを占め、全て〈意志〉系の用法となっている。〈信念〉系の用例も2割程度出現しており、用例の比率の面から見て近世期と似通った傾向を示している。明治期になっても新たな用例は出現しておらず、「つもり」の様相に大きな変化は見られないと言ってよいと思われる。

4.4 明治後期から大正期の用例

続いて、明治後期から大正期の用例を見ていく。新潮文庫「明治の文豪（CD-ROM版）」（時期は1887～1920年）を使用し「つもり」の用例を収集したところ、全807例を得た。ここから〈計算〉と〈推量〉の意で用いられている例を除くと、考察対象は804例となった。これらを4つの用法別に分類すると、それぞれ454例・80例・254例・16例となった。以下に例を挙げる。

- (40) 「今度は露西亜料理を食いに行く積りだ。どうだ一所に行かんか」
 （夏目漱石『虞美人草』）
- (41) 「決心したって、死ぬわねえ。わたしなんか是非及第する積だったけれども、
 とうとう落第してしまったわ」
 （夏目漱石『吾輩は猫である』）
- (42) 客が芸者を相手にしている積りでいるだけで、芸者は些しもこの客を相手にしては
 いない。客は芸者を抑揄っている積りで、徹頭徹尾芸者に抑揄われている。
 （森鷗外『青年』）
- (43) 先生達は二階に通った。幸いにして客はまだ多くなかった。近在の婆さんづれ
 が一組、温泉にでも来たつもりで、ゆもじ一つになって、別の室にごろごろして
 いた。
 （田山花袋『田舎教師』）

(40)(41)はいずれも未実現の事態について述べており、〈意志〉系の用法であるが、「露西亜料理を食いに行く」ことは自己制御性が高く〈達成の意志〉となるが、「及第する」ことは自己制御性が低いため〈過程の意志〉となる。ここでは「及第するよう努力する」といった意志を表している。(42)(43)は〈信念〉系の用法であり、今まで述べてきたように〈思い込み〉と〈仮想〉の両方が存在する。

収集した「つもり」の前接語は前代に比べてバリエーションが非常に多くなっている。用法別に用例数を示すと以下の表のようになる。

【表4】明治後期～大正期における「つもり」の用法と前接語

用法\前接語	スル	シタ	指示詞	テイル	シナイ/ヌ	Nの	どうする	トイウ	サセル	ナイ	形容詞
〈達成の意志〉	367	0	19	2	23	3	19	9	9	0	0
〈過程の意志〉	54	0	11	0	7	1	0	2	0	0	0
〈思い込み〉	13	81	34	43	13	27	0	7	0	7	7
〈仮想〉	4	7	0	0	0	3	0	0	0	0	0
全体	438	88	64	45	43	34	19	18	9	7	7
用法\前接語	形容動詞	テイナイ	ヨウナ	サレル	Nデハナイ	テイタ	マス	単独	ツツアル	タイ	計
〈達成の意志〉	0	0	0	0	0	0	1	1	0	1	454
〈過程の意志〉	0	0	0	3	0	0	1	1	0	0	80
〈思い込み〉	6	6	3	0	3	3	0	0	1	0	254
〈仮想〉	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	16
全体	6	6	5	3	3	3	2	2	1	1	804

基本的な傾向は変わらず、ル形が全438例で半数以上を占め、そのうち421例が〈意志〉系の用法で使われていた。タ形は全88例であり用例数もそれまでに比べ増加しているが、全て〈思い込み〉か〈仮想〉用法の例である。テイル形は明治に入ってから

ら僅かに用例が見られるのみであったが、今回は全45例見られ、稀な例ではなくなっている。大半が〈思い込み〉として使われ、〈意志〉の例は僅かである。これまで見られなかったが新たに出現した形式として、「テイタ」「テイナイ」や形容詞・形容動詞が「つもり」に前接する例が挙げられる。これらは状態性を持つ形式であるため、用法は全て〈思い込み〉である。以下に例を挙げる。

- (44) 僕は世間の掟として、三千代さんの夫たる君に詫まる。然し僕の行為その物に対しては矛盾も何も犯していない積りだ。 (夏目漱石『それから』)
- (45) おれは言葉や様子こそ余り上品じゃないが、心はこいつらよりも遙かに上品な積りだ。 (夏目漱石『坊ちゃん』)

20世紀初頭の用例を見るに、現代語を対象とした研究での指摘との間に差はない。従って、「つもり」の歴史的変化は明治後期ごろに概ね完了し、それ以降は大きな変化は見られないと言える。

5. 「つもりだ」の用法に見られる変化

土岐(2010)が述べるように、名詞「つもり」がコンピュータを伴い「つもりだ」という形で一般的に用いられるようになったのは、およそ18世紀末から19世紀初頭のことである。前節で示したように、江戸語・上方語ともに体系的な用例を見出すことができ、現代語と同じく〈意志〉用法として中心的に用いられている。しかし近世期と明治期以降における「つもりだ」の用例を詳細に見てみると、その使用のされ方に変化が生じていると考えられる。本節ではこの点について明らかにしていきたい。

まず「つもりだ」の用法として、本稿では〈達成の意志〉〈過程の意志〉〈思い込み〉〈仮想〉の4つを設けた。これらの用法は、「前接する事態の実現のあり方」と「前接する事態の自己制御性」という2つの観点から見ると、以下のように捉えることができる。

【表5】「つもりだ」の諸用法のまとめ

	〈達成の意志〉	〈過程の意志〉	〈思い込み〉	〈仮想〉
実現のあり方	未実現		既実現	反事実
自己制御性	高い	低い	非自己制御性	

用法が〈意志〉系か〈信念〉系かは、事態の未実現／既実現によって決まる。〈意志〉とは基本的に発話時以降に当該の事態を成立させようとするものであるため、発話時においては未実現である。〈思い込み〉は過去または現在の事柄について話し手がそう考えていることを述べる用法であるため事態は既実現となる⁸。〈仮想〉は事実に反する事柄を話し手が仮に想定するものであるが、事態が反事実のものであることは話し手自身が了解しており、話し手がそう考えているという点では〈思い込み〉に近い。発話時以降に当該の事態を実現させようとするものではないため、少なくとも〈意志〉用法とは見なせない。

自己制御性の点からは、当該の事態の達成までを話し手の意志によって制御することのできる〈達成の意志〉と、事態の達成までは制御することができず、そうなるように話し手が努めることを表す〈過程の意志〉の2つが区別できることを既に述べた。これは事態のどの段階まで話し手が制御できるかという点で、自己制御性の高低と捉えることができる。一方〈思い込み〉や〈仮想〉、すなわち〈信念〉系はそもそも自己制御性という軸では捉えられないと考えられる。〈思い込み〉は可能動詞などの無意志動詞、動詞のタ形・テイル形、形容詞・形容動詞などが「つもり」に前接する例であり、これらは発話時から見て現在や過去の事態である。つまりこれらは既に実現している内容であり、話し手の意志で制御できるようなものではないからである。また状態性のある語句の場合、話し手の意志の埒外にあるためやはり自己制御性は持たない。〈仮想〉の場合も同様であり、話し手自身が事実に反すると認識している内容であるのだから、意志による制御は不可能である。

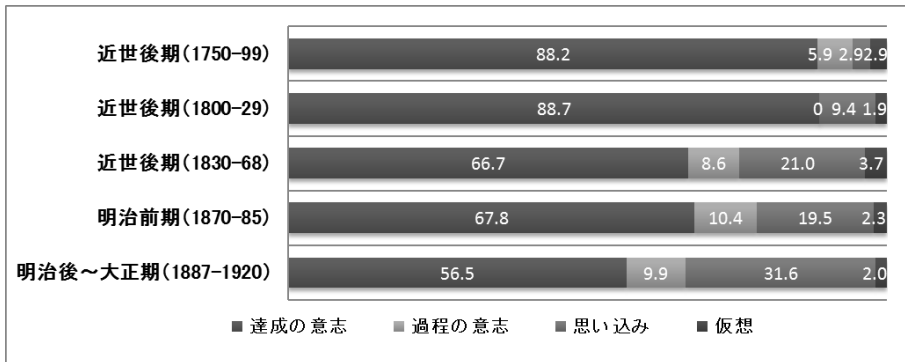
以上のことをまとめると、当該事態の成立のあり方の点から見れば〈過程の意志〉と〈思い込み〉の間（言い換えれば〈意志〉と〈信念〉の間）に、当該事態の成立に対する自己制御性の点から見れば〈達成の意志〉と〈過程の意志〉の間に線が引けることになる。ここで〈過程の意志〉という用法の存在は注目に値する。上に述べたことから分かるように、〈過程の意志〉は、典型的な〈意志〉用法である〈達成の意志〉と〈思い込み〉の中間的な用法であると言うことができるだろう。吉川・酒井（2003）では、この用法を「過信」と呼び、次のような例を挙げている。

(46) 優勝するつもりで懸命に走った。

⁸ 〈思い込み〉用法に関して、現実世界における事態の実現／非実現には外部状況等により両方の可能性がある。従ってここで言う「既実現」は、実際に当該の事態が実現済みということではなく、話し手の信念世界において真である・実現している、といった意味で用いている。

吉川・酒井（2003）ではこうした例を「実現困難な動作を表す動詞の場合」と述べ、「優勝しようと思って」という〈意志〉の側面と「優勝できている」という〈思い込み〉の側面が併存していると説明している。やや直感に頼った説明ではあるものの、〈意志〉と〈思い込み〉の連続性を指摘した点は重要であると思われる。

このような点を踏まえて、「つもりだ」の通時的変遷を見ていく。前節で調査を行った近世後期、明治前期、明治後期～大正期について、先の4用法別に全体に占める比率を以下の図にまとめた。近世後期については、変遷過程をより細かく見るために時期を3つに区切り、また江戸語と上方語はまとめて数値を出している。



【図】各時期における「つもりだ」の用法の比率(%)

これより、近世から近代にかけて〈達成の意志〉と〈思い込み〉にそれぞれ20%ほどの増減が見られることが分かる。おおよそ1830年頃から〈思い込み〉の比率が大きく上昇し、それに伴って〈達成の意志〉の比率が下がっている。その後明治前期にかけて〈思い込み〉の比率はそれほど変化せず、また明治後期には更に比率が上昇することから、〈思い込み〉の増加という一貫した変化と捉えられる。別の角度から見れば、それまであった〈意志〉への顕著な偏りが1830年頃から弱まったと言うこともできる。また、数は少ないものの〈信念〉系の用例も18世紀後半には既に出現しており、〈意志〉系と比べて遅れるわけではない。4節で述べたことの繰り返しではあるが、近世後期を細かく見ても同様のことが指摘できる。

〈思い込み〉の増加に関しては、前接語句の変化が大きく関連していると考えられる。動詞のタ形が前接する比率も明治前期までと比べて大きく増加し、それまでほぼ見られなかった動詞のテイル・テイタ・テイナイ形や形容詞・形容動詞などが前接す

る例が新たに出現したことにより、全体として〈思い込み〉の比率が上昇したと言えよう。〈達成の意志〉の減少に関しては、その大半を占める動詞のル形の前接する比率が大きく変動していないことから、〈思い込み〉用法の増大による相対的な変化であると捉えることができる。そしてその背景には、前接語の形態的バリエーションが増え、新たな形態が「つもりだ」に付加されるようになったことが挙げられる。まとめれば、動詞ル形が全体の半数以上を占めその大半が〈達成の意志〉となる点は変わらないが、それ以外の形態が前接する例が多く見られるようになり、結果的に〈思い込み〉の例が増加するという変化が近世末から近代にかけて生じたことになる。

こうした変化は、「つもりだ」によって述べられる事態がどのようなものかという点からも言及することができる。近世期においては〈達成の意志〉すなわち自己制御性の強い事態について述べるものが全体の約4分の3を占め中心的な用法であったが、明治後期から大正期にかけては半数強に減少している。これは、自己制御性の弱い、あるいは無い事態も「つもりだ」によって表すことも稀ではなくなり、近世期のような偏りがなくなっていることを意味する。図1を見ると、〈思い込み〉の増加と連動して減少しているのは〈達成の意志〉であり、この変化は近世期に存していた偏りを解消するものと解釈できる。ここで〈過程の意志〉は減少していないことから、近世期の「つもりだ」に見られる偏りは〈意志〉全体ではなく、その中でも特に〈達成の意志〉だと言うことができる。すなわち、典型的な〈意志〉用法中心であったものからそれ以外の用法への拡大といった方向性を指摘することが可能である。

これまで述べてきたことから言えるのは、「つもりだ」は意志を表す専用形式ではないということである。様々な先行研究で〈意志〉だけでなく〈思い込み〉や〈仮想〉用法の存在が指摘されており自明のことにも思えるが、歴史的研究においてはあまり注意が払われていない。土岐（2010）では「つもりだ」の歴史的变化について、「形式名詞「つもり」が、文法化を起し、「～するつもりだ」という文末の固定的表現として内容判断的な意志を表すようになり、談話機能重視へと変質しつつある助動詞「う」との補完機能を果たすようになってくる（p.251）」と述べられており、名詞「つもり」を「専ら意志表現としてのみ用いられる形式名詞（p.129）」と見なしている。しかしながら先に述べたように、「つもりだ」は未実現／既実現いずれの事態にも付加し、〈意志〉系と〈信念〉系両方の用例がある。近世から近代にかけて

自己制御性の低い事態が「つもりだ」によって多く表されるようになったことを考えると、「つもりだ」の変化を「意志表現専用化」と言うことはできない⁹。

「つもりだ」が意志表現（特に〈達成の意志〉）として用いられることが多いのは確かだが、それは意志を表すような表現が「つもり」に前接する場合であって、「つもり」自体には意志の意味はないと考えられる。中道（1993）が指摘するように、「つもり」自体は「そのように考える」といった意味を持ち、未実現の事柄について考える場合に〈意志〉用法となる。「つもりだ」に見られる変化は、「そのように考える」内容が多様になっていったという具合に捉えることができる。

6. 否定形式「つもりはない」の出現について

現代語において「つもりだ」の否定形式としては、「しないつもりだ」「するつもりはない」「するつもりではない」の3つが存在する。尾崎（2003a）はこれら3形式の意味を、それぞれ「当該の行動をとらないという《意志》を表す」「当該の行動をとる《意志》はないということを表す」「主体の行動、発話の裏にある《意図》は“～つもり”というものではないと説明する（以上 p.53）」のようにまとめており、各形式を構成的に見ても理解できるものだと思われる。また加藤（1994）ではモダリティ形式の否定形について、「Xはない」は存在の否定であり「Xではない」は叙述（描写）の否定であると述べられている。「つもりだ」に置き換えると、「つもりはない」は意志が存在するかしないかに焦点を当てて意志が存在しないことを述べるものであり、「つもりではない」はある意志が存在することを前提とした上でその意志の叙述の仕方が適当ではないとして否定する形式ということになる。

これら「つもりだ」の否定形式のうち、「～ないつもりだ」と「つもりではない」は近世・明治前期から既に存在している。

(47) 北八「しれたことよ。しかしこつちへは来ぬつもりだ」

（東海道中膝栗毛・p.244）

(48) 継「実ア僕なんぞも大に悟る所ありだ。以後も放蕩はするかもしれんが。人の
お世話にやアならない積だ」

（当世書生気質・p.106）

⁹ただし、近世期に見られた〈推量〉や〈計算〉といった用法が明治以降見られなくなることを考えると、用法が整理されたと言うことは可能であろう。ここでは「整理」された〈意志〉用法が一様ではないことを指摘したい。

(49) 与「モウそんな事はどうでもいゝからおひでも取んねへ」万「ナニやきもちをやくつもりじやアないけれども人も此様かと思つてツイ何か言ッていけないハ」
(春色恋廻染分解・p.141)

(50) 獨言をいひながら元の座敷へ参りましたが、忠義も度を外すと却て不忠に随て、お米は決して主人に猥褻な事をさせる積ではないが、何時も嬢様は別にお楽しみもなく、鬱いでばかり入ツしやるから、斯いふ串戯でもしたら少しはお気晴しになるだらうと思ひ
(怪談牡丹燈籠・p.10)

しかしながら「つもりはない」に関しては、近世・明治前期には用例が確認できず、調査範囲では以下に挙げる 1902 年の例が最も早いものとなっている。

(51) 「だって、その位は当り前だア。お前さアばか、勝手な真似して、己ら尤められる積はねえだ」
(田山花袋『重右衛門の最後』)

明治後期～大正期における「つもり」の全 804 例のうち、「つもりはない」は 17 例見られたが、全て 20 世紀以降のものであった¹⁰。また、同時期に「～ないつもりだ」が 59 例、「つもりではない」が 35 例見られることを考えると、「つもりはない」の少なさが目立つ。現代語を対象に調査を行った高梨（2016）によると、「つもり」の後接形式のうち「つもりはない」の占める割合は 18% に上る一方、「つもりではない」は僅か 1% に留まっている。よって現代語では「つもりだ」の否定形式として「つもりはない」の方が遥かに一般的だが、少なくとも明治期まではそうではなかったことが分かる。「つもりはない」は「つもりだ」の成立と比較すると新しい形式であり、この約 100 年の間にその勢力が大幅に伸長したと言えるだろう。

他の 2 形式は「つもりだ」の成立とさほど間を開けずに例が確認できる。「～ないつもりだ」は「つもり」に前接する語句が否定形をとっただけであり、尾崎（2003a）が述べるように「つもりだ」の持つ意味用法に回収できる。「つもりではない」は、「つもり」を名詞と捉え「Nだ」のように考えれば、それを単純に否定したものと見

¹⁰ 「日本語歴史コーパス 明治・大正編」を使用して「つもり」の例を検索したところ、「つもりはない」の例で最も早いのは 1894 年『女学雑誌』の例であり、これが現時点で確認できた唯一の 19 世紀の例である。

・我家近く漕ぎ行ことも思ひの外突然船を覆がへされて、「岩か、岩であつた！」と一聲悲鳴を洩しつつ逆捲く潮流の下に埋められた漁師のことを申す積りも御座いません。

(ヂーン・インヂロー(作)／若松賤子(訳)「淋しき岩の話(下)」『女学雑誌』1894 年 30 号)

なせる。従って、この2形式が早くから存在していることは全く不自然ではない。寧ろ、「つもりはない」の方が特殊な形式であると考えることができる。「つもりはない」は「つもり」に助詞が後接している点から見て、「つもりだ」よりも相対的に名詞性を有した用法である¹¹。現代語の用例を観察すると、「つもり」の後に「など」「なんか」等のとりたて詞が接続して「ない」に続く例や、「つもりは」と「ない」の間に「全く」「毛頭」等の副詞が介在する例も見られた¹²。これらは「つもりはない」が否定形式として一語のように捉えられているのではなく、「つもり」が「無い」のように、分析的に捉えられていることを示している。これは「つもりはない」が「つもり」の非存在であると述べた加藤（1994）の指摘と同様のものである。

以上のことから、「つもりはない」は「つもり」という名詞の非存在を表す表現として明治後期になって「つもりだ」とは別に成立したと考えるのがよいだろう。「つもりはない」という表現が成立するためには、「つもり」に〈意志〉の意味が焼き付けられており、それが「つもりだ」から析出されなければならない¹³。つまり、19世紀までは「つもり」は名詞として自由に振る舞えたわけではなく、コピュラを後接させて専ら文末形式として機能していたと言える。これは土岐（2010）で既に明らかにされていることだが、近世期において「つもり」が文末での使用に固定化されても、それに伴って名詞性が遡減したと考えるのは適切ではなく、一貫して名詞性を保っていたと思われる。もちろん連体修飾を受けずに単独で使用されなくなるなどの制約は生じたものの、助動詞化の程度は比較的小さいと言えよう¹⁴。名詞としての振る舞い

¹¹ 高梨（2016）では、「つもりがない」「つもりをする」等について、「名詞としての用法」と述べている。

¹² 「つもりは」と「ない」の間に副詞が介在する例は、明治期から既に存在している。
・三四郎に度外れの女を面白がる種りは少しもないのだが、突然御茶を上げますと云われた時には、一種の愉快を感じぬ訳に行かなかったのである。（夏目漱石『三四郎』）

¹³ 「つもり」単独には〈意志〉の意味はなく、また「つもりはない」が〈思い込み〉の用法となる例も存在するので、正確を期すなら〈考え〉とした方が適切である。ここでは「つもりはない」の多くが〈意志〉用法となることを考慮して、〈意志〉の場合に限定して議論を進める。〈思い込み〉の場合も説明としては同様である。

¹⁴ この点は、「はずだ」との比較が分かりやすい。「はずだ」にも「はずがない」という否定形式が存在するが、BCCWJを使用して調査したところ「はずが」と「ない」の間に副詞が介在する例は僅か3例しか見られなかった。一方「つもりはない」の場合は計164例を数え、両者の名詞性の差は明らかである（なお、総数で見ると「はず」は「つもり」の2倍以上ある）。

また、次のような例も示唆的である。

・マッケンジーには辛抱強く彼を説得するつもりも時間もなかった。

（酒井裕美(訳)『報復の最終兵器』）

に制限があった理由について直接的に説明することは難しいが、「つもり」が本来的な名詞ではなく動詞連用形から派生したものであることと関係する可能性がある。

「つもりはない」の出現は、「つもり」を〈意志〉の意を持つ名詞と再解釈し、その非存在を述べることで「当該の行動をとる意志がない」ことを表すような述べ方が新たに行われるようになったものと考えられる。これは〈意志〉や〈考え〉といったものを幾らか抽象化して捉える発想であり、「つもりだ」の使用が完全に定着していたことを示すものでもあろう。「つもり」に〈意志〉や〈考え〉といった意味を読み込めるということはすなわち、それ以外の意味が消滅していることでもあり、〈計算〉や〈推量〉などの用法が僅かながらも存在していた近世期および明治初期には未だ「つもり」と〈意志〉が一对一で対応していなかったと想定される。それゆえ、「つもりはない」の出現が明治後期まで時代を下ったのだと考えられる。

前節で述べた〈信念〉系の用法の増加も、おおそ明治以降に見られる変化であり、「つもりはない」の出現と時期を同じくしている。ここで、これらの変化に関連性があるのかという点が問題となるが、結論から言えば直接的な因果関係は想定しにくい。「つもり」にどのような性質の語句が前接するかという問題と、「つもり」の名詞としての認識の度合いの問題は別であり、未実現事態への偏りが小さくなったから話者の思考を表す名詞としての独立性が増したとは考えられない。「つもりはない」は肯定形式の「つもりだ」より〈意志〉用法の比率が高いことから¹⁵、無意志表現が多く前接するようになる変化とは繋がらないと考えられる。

なお、「つもりはない」という形式が存在していなかった近世期においては、ほぼ同様の意味を表す意志表現として「～しない」が用いられていたと考えられる。

- (52) おはる「ヲヤ~~／＼~~／＼／＼。さうじやアないよ。先刻^{きつぎ}の極じやア、私がおかみ
 さんな筈だよ。私は夫じやア否。おまへとは遊~~ない~~よ」 （浮世風呂・p.136）
- (53) 丹「娠がしうとだの。おらア寝やアしねへぜ。かいまきをかけずといゝぜ」
 （春色辰巳園・p.372）

・ベスト百には入る予定もつもりも全くありませんがオークションと同じIDなので公開されるのは嫌だなあ…と。そう思ってる方はいらっしゃいますか？（Yahoo!知恵袋）
 これらの例では「つもり」が「時間」や「予定」といった名詞と並列して用いられており、事実上〈意志〉の意を表す実質名詞として機能していると言える。この場合、もはや「つもり」を形式名詞と言うことさえ難しいように思われる。

¹⁵ 「つもりはない」全17例のうち〈意志〉が14例、〈思い込み〉が3例であり、〈意志〉用法の比率は82.4%となる。肯定形式の「つもりだ」（全体から「つもりはない」と「つもりではない」を除いたもの）においては全752例中494例が〈意志〉用法であり、65.7%となっている。

「当該の行動をとる意志がない」ことを述べたければ「当該の行動をとらない」と言えば充分であり、両形式の表す意味は極めて近い。もちろん動詞終止形と「つもりだ」にも違いがあるが、どちらかと言えば動詞終止形の方が使用範囲の広い形式であると思われる¹⁶。「～しない」を「つもりはない」に置き換えることは必ずしもできないが、その逆は概ね可能であろう。よって「つもりはない」という形式が存在しなくても、意志表現の体系に何らかの不整合が生じるということはなかったと言える。

最後に、これまで述べてきたことから「つもりだ」の変化について示唆される点を指摘しておきたい。現代語においては「つもりだ」を一語の助動詞相当として捉えることが一般的であり、いわゆる機能語化（文法化）の例としてもしばしば引き合いに出される（三宅 2005、青木 2010、小柳 2015）。土岐（2010）でも、形式名詞「つもり」が文法化を起こしたといった説明がなされている。この説明は妥当なものだと考えるが、「つもり」が文法化を起こして「つもりだ」という機能語を生んだのは近世後期においてであるという点には注意しなければならない。つまり、文法化によって助動詞相当の「つもりだ」が生み出されたとして、そこで変化が終了したわけではないのである。本稿では「つもりだ」から〈意志〉を表す名詞として「つもり」が析出され、否定形式「つもりはない」が成立したと考えるが、これは明治後期ごろに起こった現象であり、機能語化（文法化）とは言えない。この点に関しては、他の「名詞＋だ」の形をとるモダリティ形式とは異なる「つもりだ」特有の現象であり、これまで一括して扱われてきた諸形式の間に微妙な差異があることが示唆される。

7. おわりに

本稿では、近世から明治・大正期までの「つもりだ」についてその変化の在り様を分析した。「つもりだ」には大きく分けて未実現の事態について述べる〈意志〉系の用法と、既実現の事態について述べる〈信念〉系の用法とがあるが、近世期において既にそのどちらの用法も確認できる。従って、両用法を派生関係にあると見なすのではなく、「～と考える」といった両者に共通する意味を想定した方がよいと考えられる。しかしながら、近世期と明治後期では「つもり」に前接する要素に変化が見られ

¹⁶ 否定の意志表現について論じた尾崎（2003b）によると、「～しない」と「つもり」系の否定は、意志決定の時点と伝達意図の有無の2点から見て「～しない」の性質が「つもり」系の性質を含み込んでおり、前者の方が広く使用できる形式であると言える。また両者の違いについても言及されているが、「～しない」を用いて不自然になるような例は挙げられていない。

ることが明らかになった。近世期には自己制御性の高い語が前接し〈達成の意志〉を表す用例が大半を占めたが、明治後期には自己制御性の低い、または無い語を伴う〈過程の意志〉や〈思い込み〉を表す用例が多く用いられるようになった。これは、典型的な〈意志〉からの用法の拡大と捉えることができる。更に「つもりはない」という否定形式が20世紀まで見られなかったことを指摘したが、これは「つもり」の名詞性が時代を下っても比較的強く存していたことを示唆していると言えよう。

「つもりだ」の成立や歴史的変遷については、未だ明らかでない点も多い。近世期に〈意志〉用法を中心に成立したがその後〈思いこみ〉も増加したということは、前接要素の点から見ればタ形やテイル形など新たな語が付くようになったと捉えることができるが、ここで「つもり」がどのような形式として認識されていたのかに関しては、明示的に述べることができなかった。また、明治後期に「つもりはない」という否定形式が出現した要因についても、直接的な説明には至っていないであろう。本稿では「つもりだ」の歴史について用法の面から分析・考察を試みたが、より詳細な検討が必要であるとともに、新たな論点を設定することも求められる。

調査資料

（私意によって表記を改めたところがある。また、以下では次の略号を用いる…大系：岩波書店『日本古典文学大系』、全集：小学館『日本古典文学全集』）

近世後期（江戸） 歌舞伎：名歌徳三舛玉垣、お染久松色讀販、小袖曾我薊色縫（大系）／黄表紙：金々先生栄花夢、高漫斎往行脚日記、見徳一炊夢、御存商売物、大悲千祿本、莫切自根金生木、江戸生艶気蒲焼、文武二道万石通、孔子縞于時藍染、心学早染艸、敵討義女英（大系）／洒落本：遊子方言、辰巳之園、道中粹語録、卯地臭意、総籬、傾城買四十八手、錦之裏、傾城買二筋道（大系）、跣婦人伝、甲駟新話、古契三娼、繁千話（全集）、郭中奇譚、南江駟話、俠者方言、両国菜、南閨雑話、婦美車紫鹿子、寸南破良意、当世左様候、妓者呼子鳥、穴知鳥、ことぶき草、三幅対、酔姿夢中、深川新話、美地の蛸殻、南客先生文集、多佳余字辞、芳深交話、遊婦里会談、雲井双紙、真女意題、通人三国師、花街鑑、青楼女庭訓、花街寿々女、潮来婦志、潮来婦志後編（中央公論社『洒落本大成』）／滑稽本：東海道中膝栗毛、浮世風呂（大系）、酩酊気質、浮世床（全集）／人情本：春色梅児譽美、春色辰巳園（大系）、春告鳥（全集）、春色恋廻染分解（浅川哲也編『春色恋廻染分解 翻刻と総索引』おうふう）

近世後期（上方） 洒落本：穿当珍話、聖遊廓、新月花余情、陽台遺編・姍閣秘言、月花余情、原柳巷花語、夢中生樂、間似合早粧、異本郭中奇譚、浪華今八卦、無論里問答、風流裸人形、虚辞先生穴贅、短華葵葉、眸のすじ書、北華通情、うかれ草紙、阿蘭陀鏡、十界和尚話、粧学問、身体山吹色、南遊記、昇平樂、後涼東訛言、嘘之川、一文塊、竊潜妻、当世廓中掃除、左登能花、粧の曙、箱まくら、色深狹睡夢、北川蜆殻、興斗月、思増山海の習草紙、風俗三石土、千歳松の色、水の行すえ、なにはの芦、誰が面影（中央公論社『洒落本大成』）／浄瑠璃：新版歌祭文（大系）／歌舞伎：韓人漢文手管始（大系）／滑稽本：穴さがし心の内そと（前田勇 1974『近代語研究 第四集』武蔵野書院）

近代 西洋道中膝栗毛、安愚楽鍋、春雨文庫、怪談牡丹燈籠、当世書生氣質（筑摩書房『明治文学全集』）／学問のすゝめ、文明論之概略（岩波書店『福沢諭吉全集』）／「CD-ROM版新潮文庫 明治の文豪」新潮社／「日本語歴史コーパス 明治・大正編 I 雑誌（Ver.2016.10）」国立国語研究所

現代 「現代日本語書き言葉均衡コーパス」国立国語研究所

参考文献

- 青木博史（2010）「名詞の機能語化—形式名詞を中心に—」『日本語学』29-11, pp.40-47, 明治書院
- 尾崎奈津（2003a）「「スルツモリダ」の否定形について—「シナイツモリダ」「スルツモリハナイ」「スルツモリデハナイ」—」『岡山大学言語学論叢』10, pp.43-56
- 尾崎奈津（2003b）「否定の意志表現をめぐる」『岡山大学大学院文化科学研究科紀要』15, pp.29-42
- 加藤陽子（1994）「名詞性をもつモダリティの否定形式について」『日本語と日本文学』20, pp.12-21, 筑波大学国語国文学会
- 北村雅則（2010）「ツモリダの用法と構造変化—文法史研究の一試論—」田島毓彦(編)『日本語学最前線』pp.459-474, 和泉書院
- 小柳智一（2015）「文法変化の方向」『KLS』35, pp.323-334, 関西言語学会
- 佐田智明（1974）「「はず」と「つもり」」『北九州大学文学部紀要』10, pp.41-53
- 高梨信乃（2016）「「つもり(だ)」をめぐる—意志表現の指導の観点から—」『神戸大学留学生センター紀要』22, pp.1-20
- 土岐留美江（2010）『意志表現を中心とした日本語モダリティの通時的研究』ひつじ書房
- 中道知子（1993）「「つもり」の意義素」『大東文化大学創立七十周年記念論集(上)』pp.519-529

中村香生里（2017）「「～するつもりだ」「～(よ)うと+思考動詞」の歴史的変遷—意志表現の定着と相互比較—」『同志社大学 日本語・日本文化研究』15, pp.39-91

仁田義雄（1991a）『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房

仁田義雄（1991b）「ヴォイス的表現と自己制御性」仁田義雄(編)『日本語のヴォイスと他動性』pp.31-57, くろしお出版

八田ゆかり（2001）「ダブルテンスの述語形式「～するつもりだ」の意味」『国文』96, pp.64-78, お茶の水女子大学国語国文学会

三宅知宏（2005）「現代日本語における文法化—内容語と機能語の連続性をめぐって—」『日本語の研究』1-3, pp.61-76

吉川武時・酒井順子（2003）「つもり」吉川武時(編)『形式名詞がこれでわかる』pp.177-194, ひつじ書房

付記 本稿は、日本語学会 2017 年度春季大会（於：関西大学）における口頭発表に加筆・修正を施したものである。発表に際して貴重なご教示を賜った方々に感謝申し上げる。

かわしま たくま／人文社会科学研究科
(2017 年 10 月 14 日 受理)